

目的 少子化、核家族化がすすみ、また家族のあり方が多様化していといわれる現在、子どもの立場からとらえられた、家族とのかかわりとその変化、発達とはどのようなのだろうか。小学生期、中学生期、高校生期、大学生期、ではどのように家族とのつながりが意識化され、変化していくのか、そのかかわりの発達過程について考察する。

方法 各時期の家族とのかかわり、家族の問題、将来の自分の家族のイメージなどについての質問紙を実施し、その結果を分析、考察する。対象は大学家政学科学生222名である。

結果と考察 家族とのかかわりは、小学生期は内在的発達、中学生期は内接的発達、高校生期は接在的発達、大学生期は外接的発達がなされる傾向がみられた。これらの発達を促進する家族や子どものあり方として、内在化においては家族に守られる、自分中心にいられるなど、内接化においては家族の問題が起こる、自己の確立が進む、役割を担うなど、接在化においては家族から頼られる、対等に理解しあえる人間関係、自立心が強まるなど、外接化においては、家族成員の独自の領域の顕在化、共通時間・空間の減少など、いくつかの特性が考察された。かかわりの発達の個別差（ばらつき）は中学生期から目立ちはじめ、高校生期、大学生期と、さらにそのあり方は多様になる。また、中学生期は家族との関係の転換期にあたり、関係の調整、発展的対応が特に重要であることがわかった。